



揺れた、揺れた、世界が揺れた。

家も、街も、道路も、木々も、お城も、揺れた。

揺れた、揺れた、心が揺れた。

揺れた、揺れた、思考が揺れた。

子ども達の前で、私はまるで、虎の威を借る狐のようだった。治まらない余震のただ中で、天に向かい泣き言をつぶやいていた。「もう、やめてくれ!」と。私たちがどんな悪いことをしたというのか…、そんな虚しい問いかけに答えが返ってくるはずもない。地球の生命活動からすればあくび程度のことだったのだろう、けれど、そのあくび程度のことには翻弄される人間の、なんとも微々たるものかを感じ知った。



今、私たちは、とても大きなものを失ってしまった。揺れにまかせ、当たり前だった日常は壊された。皮肉にも人は、失くして始めてありきたりの毎日を懐かしみ、当たり前の日常に恋い焦がれるのだ。

そして、激震の一夜が明け、頭を上げ見渡す世界には手をさしのべる人たちがいた。自衛隊、消防隊、消防レスキュー隊、警察官など、彼らの勇姿にとりだけ安堵したかわからない。それだけではない、周りには支えてくれる仲間もいた。有難い…。

「その肩を貸してください…」

熊本地震から二ヶ月余りが過ぎた。

私はこの地で今も生きている。